

参加者の皆様からのご意見・ご質問とその回答

○食品安全委員会

□山口県

【情報提供中の質問】

Q1：今回の情報提供の内容は、以前も聞いたことがあります、X線等での医療被ばくは健康状態を見るための被ばくで、毎日受けるものではありません。そういうものと、食品からの被ばくは違います。山口県産と書いてあるお米の袋が、福島県にどっと送られているという現実もあるようで、それについては自分も農家なのでよく分かります。いろんな本にも書いてありますが、給食等に使われるものも、1kg あたり何ベクレルとかなっているものも、実際はすごい高レベルのものと低レベルのものを混ぜて出荷しているというようなこともあるようです。食品から放射能を受けるということは、一回だけには終わらないことで、毎日毎日の積み重ねです。また、広島・長崎の原爆の被害も、実際は原爆病院がデータを隠していて、日本には実際にそのデータは公表されていないと聞きます。アメリカはデータを持っていて、実験して数値を持っているそうです。ということは、（公開されているデータから）言われるような、何ミリシーベルトだったら大丈夫とかいうことは、毎日毎日食品をとる私たちにとって、特に小さい子供達にとっては、絶対安全とは言えません。また、妊婦さんのしきい値というものはあり得ないと考えて、食することが大切だと思います。東電と同じで、ほとんどの人が食べているものは安全だと、公に知らせておく、ということに変わりないと思います。小さい子供にとっては、8日を過ぎた、または6か月を過ぎたというように、時間が過ぎたら、高容量で被ばくしたものは減っているからわかりません。実際は、細胞がどうなっているか、調べてみないとわからないわけです。後になってから、調べたデータを突きつけられても、どれもこれも信じることはできません。

○：（広島・長崎について）アメリカがデータを隠しているという情報は、どこまで信じられるか難しいと考えます。日米が共同で研究して、60年前のデータを最新のコンピュータ技術で再度研究しているので、データの精度は信頼できるものと思います。データが隠されると前提と異なってしまいますが、その前提データが異なっているかという、他の事実と比べても異なっておらず、データは過小評価されているものは見られていません。

データが信じられないとなると、評価できるデータそのものが無いということになってしまうので、今観察されているデータで評価をしているところですが、そういった状況をご納得いただければと思います。食品は毎日取るものであるのも、汚染されていることは恐ろしいと思いますが、安全であることを科学的に知見で克服すること、資料を示すことが我々の仕事だと思っています。

体に対する影響は、いろいろな要因があります。物質の種類と量の問題ですが、影響を示すのに、実効線量で一元的に表現するのが国際的なやり方になっています。

Q2：通常の食品に含まれる放射性物質カリウム 40 と、セシウム 137 の放射性物質の影響の違いについて教えてください。

○：カリウム 40 とセシウム 137 は違う物質ですので、放射性線を打ち出す力が異なります。放射性線を打ち出す力は、カリウム 40 はセシウム 137 の半分とみなすことができるので、体への影響も半分であると捉えることができます。

また、放射性物質は、天然であろうと人工であろうと、体への影響は同じです。

【全体での意見交換における質問等】

Q3：情報提供のあり方、意見交換会の開催状況について教えてください。

□：山口県では、お届け講座、やまぐち食の安心・安全推進協議会による小規模意見交換会の開催等、平成 24 年度は 8 地域、16 回程度実施する取り組みを進めています。

○：大規模なフォーラム等では、どうしても意見が一方通行となるので、食品安全委員会では小規模での意見交換会を重視して実施しています。今年度は今日のような形式の意見交換会を、10 回程度予定です。

消費者庁、厚生労働省、農林水産省との 4 府省共催の意見交換会は、全国の都市で 20 回程度実施する予定です。

その他、講師派遣と言う形で、かなり小規模なレベルの意見交換会も年間 80 回近く行っています。

Q4：そもそも放射性セシウムとはどのようなもので、体のなかでどのような動きをするものなのでしょうか。

○：セシウム 137 は β 線と γ 線の 2 種類の放射線を放出して、バリウムに変化します。それ以後は安定してバリウムとして存在します。安定すれば放射性物質を放出することはありません。セシウムそのものは、カリウムやナトリウムに近い科学的性質をもっている物質です。土の中でイオン化したときに、粘土質があると、粘土質とのイオンの結合が強くなって他の場所に移動しにくくなります。即ち、泥や土に一端吸着されるとなかなか外に出にくい物質ということです。水道水は土等でセシウムが濾過されるので、飲み水は大丈夫であると考えられるでしょう。ただし、関東方面では、水道水の濾過に使用した汚泥をどう処分するのかといった問題があるようです。

Q5：放射性物質は生物濃縮によって、影響が大きくなるのでしょうか。

○：生物濃縮の一番の問題は水産物であると思います。はっきりとした事はいえませんが、生物濃縮の上位である、例えば鯨やマグロといった生物から、高濃度の放射性物質が検出されたというデータは報告されていないので、濃縮はないと考えられています。環境的な問題は当然ありますが、放射性物質のレベルが低い水質のところに移動すれば、塩類の代謝が盛んな魚の体内から放射性セシウムは速やかに排出されて、低レベルになることがわかっています。例外は定住している底魚で、なかなか排出されないようです。また、淡水魚の場合も、セシウムが抜けにくいという報告があります。

Q6：同じ 1 ミリシーベルトといっても、線種によって影響が違うのでしょうか。

○：国際的には、線種に合わせた係数をかけることによって、体への影響の強さを比較できるような仕組みになっています。

Q7：小児の方が、感受性が高いので今後の影響が心配です。

○：わかっているのはあくまで動物実験において影響がみられたということで、それも高い線量域での影響が、若い方が強いという結果でした。チェルノブイリでもそういう傾向がみられたという報告があったことから評価において、小児への影響について反映したところです。

Q8：放射性物質について、検査結果が表示してあれば分かり易いと思うのですが。

□：食品衛生法により、製造する工程で使う物については表示しなければならず、原産地等については JAS 法で産地表示義務がかせられていますが、今の段階では放射性物質に関する表示はないというのが現状です。現在、表示の枠組みを検討する動きが消費者庁であるので、ア

ンテナを立てておいてほしいと思います。

Q9：グループワークを行って、小児はやっぱり危険だと思います。加工食品は、ぜんぜん分からなくて、でたらめだと思います。なので、幼稚園、小学校などは、栄養士の指導で、単品をなるべく使うようにする、また、山口県は安全なところにあるので、地産地消を推奨するなど、使うものを決めて頂きたいと思います。

○：今後、長期的に放射性物質と付き合っていくために、新しいやり方が色々考えられていくと思います。貴重なご意見ありがとうございました。

以上